

# 水の三日

芥川龍之介

青空文庫



講堂で、罹災民慰問会の開かれる日の午後。一年の丙組（当  
日はここを、僕ら——卒業生と在校生との事務所にした）の教室  
をはいると、もう上原君と岩佐君とが、部屋のまん中へ机をすえ  
て、何かせつせと書いていた。うつむいた上原君の顔が、窓から  
さす日の光で赤く見える。入口に近い机の上では、七条君や下村  
君やその他僕が名を知らない卒業生諸君が、寄附の浴衣やら手ぬ  
ぐいやら晒布やら浅草紙やらを、罹災民に分配する準備に忙しい。  
紺飛白<sup>こんがすり</sup>が二人でせつせと晒布をたたんでは手ぬぐいの大きさに  
截<sup>き</sup>つている。それを、茶の小倉<sup>はかま</sup>の袴<sup>はかま</sup>が、せつせと折目をつけては、  
行儀よく積み上げている。向こうのすみでは、原君や小野君が机

の上に塩せんべいの袋をひろげてせつせと数を勘定している。

依田君もそのかたわらで、大きな餡パンの袋をあけてせつせと「ええ五つ、十う、二十」をやつてているのが見える。なにしろ、塩せんべいと餡パンとを合わせると、四円ばかりになるんだから、三人とも少々、勘定には辟易へきえきしているらしい。

教壇の方を見ると、繩なわでくくつた浅草紙や、手ぬぐいの截らな

いのが、雑然として取乱された中で、平塚君や国富君や清水君が、黒板へ、罹災民の数やら塩せんべいの数やらを書いてせつせと引いたり割つたりしている。急いで書くせいか、数字までせつせと忙しそうなかつこうをしているから、おかしい。そうすると広瀬先生がおいでになる。ちよつと、二言三言話して、すぐまたせつ

せと出ていらつしやる。そのうちにパンが足りなくなつて、せつせと買い足しにやる。せつせと先生の所へ通信部を開く交渉に行く。開成社へ電話をかけてせつせとはがきを取寄せる。誰でも皆せつせとやる。何をやるのでもせつせとやる。その代わり埒らちのあくことおびただしい。窓から外を見ると運動場は、処々に水のひいた跡の、じくじくした赤土を残して、まだ、壁土を溶かしたような色をした水が、八月の青空を映しながら、ところりと動かすにたたえている。その水の中を、やせた毛の長い黒犬が、鼻を鳴らしながら、ぐしょぬれになつて、かけてゆく。犬まで、生意氣にせつせと忙しそうな気がする。

慰問会が開かれたのは三時ごろである。

鼠色の壁と、不景気なガラス窓とに囲まれた、伽藍のよくな講堂には、何百人かの罹災民諸君が、雑然として、憔悴した顔を並べていた。垢じみた浴衣で、肌つこに白雲のある男の児をおぶつた、おかみさんもあつた。よこれた、薄い縕袍に手ぬぐいの帶をしめた、目のただれた、おばあさんもあつた。白いメリヤスのシャツと下ばきばかりの若い男もあつた。大きなかぎ裂きのある印半纏に、三尺をぐるぐるまきつけた、若い女もあつた。色のさめた赤毛布を腰のまわりにまいた、鼻の赤いおじいさんもあつた。そうしてこれらの人々が皆、黄ばんだ、弾力のない顔を教壇の方へ向けていた。教壇の上では蓄音機が、鼻くたのよ

うな声を出してかつぽれか何かやつていた。

蓄音機がすむと、伊津野氏の開会の辞があつた。なんでも、かなり長いものであつたが、おきのどくなことには今はすつかり忘れてしまつた。そのあとで、また蓄音機が一くさりすむと、貞水の講談「かちかち甚兵衛じんべえ」がはじまつた。にぎやかな笑い顔が、

そこここに起る。こんな笑い声もこれらの人々には幾日ぶりかで、口に上つたのであろう。学校の慰問会をひらいたのも、この笑い声を聞くためではなかろうか。ガラス窓から長方形の青空をながめながら、この笑い声を聞いていると、ものとなく悲しい感じが胸に迫る。

講談がおわるとほどなく、会が閉じられた。そうして罹災民諸

君は狭い入口から、各の室へ帰つて行く。その途中の廊下に待つていて、僕たちは、おとなの諸君には、ビスケットの袋を、少年少女の諸君には、塩せんべいと餡パンとを、呈上した。区役所の吏員や、白服の若い巡査が「お礼を言つて、お礼を言つて」と注意するので、罹災民諸君はいちいちていねいに頭をさげられる。

中でも十一、二の赤い帯をしめた、小さな女の子が、「お礼を言つて」と言われるとぴつたり床の上に膝ひざをついて、僕たちのくつであるく、あの砂だらけの床板に額をつけて、「ありがとう」と言われた時には、思わず、ほろりとさせられてしまった。

慰問会がおわるとすぐに、事務室で通信部を開始する。手紙を

書けない人々のために書いてあげる設備である。原君と小野君と僕とが同じ机で書く。あの事務室の廊下に面した、ガラス障子をはずして、中へ図書室の細長い机と、講堂にあるベンチとを持ちこんで、それに三人で尻しりをすえたのである。外の壁へは、高田先生に書いていただいた、「ただで、手紙を書いてあげます」という貼紙はりがみをしたので、直ちに多くの人々がこの窓の外に群がつた。いよいよはがきに鉛筆を走らせるまでには、どうにか文句ができるだろうくらいな、おうちやくな根性ですましていたが、こ<sup>うなつてみると、いくら「候間」や「候段」や「乍はばかり 憚ながら 御休</sup>神下され度」でこじつけていつても、どうにもこうにも、いかなくなってきた。二、三人目に僕の所へ来たおじいさんだつたが、

聞いてみると、なんでも小松川のなんとか病院の会計の叔父の妹の娘が、そのおじいさんの姉の嫁の里の分家の次男にかたづいていて、小松川の水が出たから、そのおじいさんの姉の嫁の嫁の里の分家の次男の里でも、昔から世話になつた主人の嫁が持つてゐる水車小屋へ、どうとかしたところが、その病院の会計の叔父の妹がどうとかしたから、見合わせてそのじいの嫁の友だちの叔父の神田の猿樂町さるがくちょうに錠前なおしの家へどうとかしたとか、なんとか言うので、何度も聞き直しても、八幡やわたの敷やぶでも歩いているように、さっぱり要領が得られないで弱つちまつた。いまだに、あの時のことを考えると、はがきへどんなことを書いたんだか、いつこう判然しない。これは原君の所へ来た、おばあさんだが、

原君が「宛名は」ときくと、平五郎さんだとなんとか言う。

「苗字はなんというんです」と押返して尋ねると、苗字は知らないが平五郎さんで、平五郎さんていえば近所じゅうどこでも知つてゐるから、苗字なんかなくつても、とどくのに違いないと保証する。さすがの原君も、「ただ平五郎さんじやあ、とどきますまい」つて、恐縮していたが、とうとうさじを投げて、なんとか町なんとか番地平五郎殿と書いてしまつた。あれでうまく、平五郎さんの家へとどいたら、いくら平五郎さんでも、よくとどいたもんだと感心するにちがいない。

ことにこつけいなのは、誰の所へ来たんだか忘れたが、宛名に「しようせんじ、のやすつてん」というやつがあつて、誰も漢

字に翻訳することができなかつた。それでも結局「修善寺野田屋支店」だろうということになつたが、こんな和文漢訳の問題が出ればどこの学校の受験者だつて落第するにきまつてゐる。

通信部は、日暮れ近くなつて閉じた。あのいつもの銀行員が来て月謝を取扱う小さな窓のほうでも、上原君や岩佐君やその他の卒業生諸君が、執筆の労をとつてくださつた。そうしてこつちも、かれこれ同じ時刻に窓を閉じた。僕たちの帰つた時には、あたりがもう薄暗かつた。二階の窓からは、淡い火影がさして、白楊<sup>はくよう</sup>の枝から枝にかけてあつた洗たく物も、もうすつかり取りこまれていた。

通信部はそれからも、つづいて開いた。前記の諸君を除いて、平塚君、国富君、砂岡君、清水君、依田君、七条君、下村君、その他今は僕が忘れてしまつて、ここに表彰する光榮を失したのを悲しむ。幾多の諸君が、熱心に執筆の労をとつてくださつたのは、特に付記して、前後六百枚のはがきの、このために費されたのが、けつして偶然でないということを表したいと思う。

その翌々日の午後、義捐金<sup>ぎえんきん</sup>の一部をさいてあがなつた、四百余の猿股<sup>さるまた</sup>を罹災民諸君に寄贈することになつた。皆で、猿股の一ダースを入れた箱を一つずつ持つて、部屋部屋を回つて歩く。ジプシーのような、脊の低い区役所の吏員が、帳面と引合わせて、

一人一人罹災民諸君を呼び出すのを、僕たちが一枚一枚、猿股を渡すという手はずであつた。残念なことに、どの部屋で、どんな人がどんなことをしていたか忘れてしまつたがただ一つ覚えているのは、五年の丙組の教室へはいった時だつたと思う。薄暗いすみつこに、色のさめた、黒い太い縞しまのある、青毛布が丸くなつていた。始めは、ただ毛布が丸めてあるんだと思ったが、例のジプシーが名まえを呼びはじめると、その毛布がむくむくと動いて、中から灰色の長い鬚ひげが出た。それから、眼の濁つた赭あから面の老人が出た。そうして最後に、灰色の長く伸びた髪の毛が出た。しばらく僕たちを見ていたがまた眼をつぶつた。かたわらへよると酒の香がする。なんとなく、あの毛布の下に、ウオツカの罐びんでも隠

してありそうな気がした。

二階の部屋をまわつた平塚君の話では、五年の甲組の教室に狂女がいて、じつとバケツの水を見つめていたそうだ。あの雨じみのある鼠色の壁によりかかつて、結び髪の女が、すりきれた毛繻子の帯の間に手を入れながら、うつむいてバケツの水を見ている姿を想像したら、やはり小説めいた感じがした。

猿股を配つてしまつた時、前田侯から大きな梅鉢の紋のある長持へ入れた寄付品がたくさん来た。落雁かと思ったら、シャツと腹巻なのだそうである。前田侯だけに、やることが大きいなあとと思う。

罹災民諸君が何日ぶりかで、諸君の家へ帰られる日の午前に、僕たちは、僕たちの集めた義捐金の残額を投じて、諸君のために福引を行うことにした。

景品はその前夜に 註文ちゆうもん した。当日の朝、僕が学校の事務室へ行つた時には、もう僕たちの連中が、大ぜい集つて、盛んに籤くじをこしらえていた。うまく紙撲こよりをよれる人が少ないので、広瀬先生や正木先生が、手伝つてくださる。僕たちの中では、砂岡君がうまく撲よる。僕は「へえ、器用だね」と、感心して見ていた。もちろん僕には撲れない。

事務室の中には、いろんな品物がうずたかく積んであつた。前の晩、これを買う時に小野君が、口をきわめて、その効用を保証

した亀のかめの子だわしもある。味噌漬みそこしの代理が勤まるというなんとか  
笊ざるもある。羊羹ようかんのミイラのような洗たくせつけんもある。草ぼ  
うきもあれば杓しゃくし子もある。下駄げたもあれば庖ほうとう刀もある。赤いベ  
ベを着たお人形さんや、ロツペン島のあざらしのような顔をした  
土細工の犬やいろんなおもちゃもあつたが、その中に、五、六本、  
ブリキの銀笛があつたのは蓋けだし、原君の推奨によつて買つたもの  
らしい。景品の説明は、いいかげんにしてやめるが、もう一つ書  
きたいのは、黄色い、能代塗のしろぬりはしの箸である。それが何百膳ぜんだかこ  
てこてある。あとで何膳ずつかに分ける段になると、その漆臭い  
においが、いつまでも手に残つたので閉口した。ちよつと嗅かいで  
も胸が悪くなる。福引の景品に、能代塗の箸は、孫子の代まで禁

物だと、しみじみ悟つたのはこの時である。

籠ができると、原君と依田君とが、各室をまわる労をとつた。少したつと、もう大せい籠を持つた人々がやつてくる。事務室の向かつて右の入口から入れて、ふだんはしめ切つてある、右のどびらをあけて出すことにした。景品はほうきと目笊とせつけんで一組、たわしと何とか笊と杓子で一組、下駄に箸が一膳で一組という割合で、いちばん割の悪いのは、能代塗の臭い箸が一膳で一組である。こいつだけは、僕なら、いくら籠に当つても、ご免をこうむろうと思う。

砂岡君と国富君とが、読み役で、籠を受取つては、いちいち大きな声で読み上げる。中には一家族五人ことごとく、下駄に当つ

た人があつた。一家族十人ばかり、ことごとく能代塗の臭い箸に当つたら、こつけいだろうと思つてたが、不幸にして、そういう人はなかつたように記憶する。

一回、福引を済ましたあとでも、景品はだいぶん残つた。そこで、残つた景品のすべてに、空籤からくじを加えて、ふたたび福引を行つた。そうしてそれをおわつたのはちょうど正午であつた。避難民諸君は、もうそろそろ帰りはじめる。中にはていねいにお礼を言いに来る人さえあつた。

多大の満足と多少の疲労とを持つて、僕たちが何日かを忙しい中に暮らした事務室を去つた時、窓から首を出して見たら、泥まみれの砂利の上には、素枯れかかつた檜ひのきや、たけの低い白楊が、

あざやかな短い影を落して、真昼の日が赤々とした鼠色の校舎の羽目には、亜鉛板やほうきがよせかけてあるのが見えた。おおかた明日から、あとそうじが始まるのだろう。

（明治四十三年、東京府立第三中学校学友会雑誌）

# 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utiyama

校正：かのうかおり

1999年1月11日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 水の三日

## 芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>